

木の目草の芽

2015年11月25日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名：川口章子

第119号

〈目次〉

- P.1 ライチョウはかなり危機的
—私たちの出番です—
大森弘一郎
- P.6 自然観察会報告
「大鹿村リニア中央新幹線
予定地を見る」
近藤雅幸
- P.9 図書紹介
安間繁樹著
「失われゆく民族の記録」
下田俊幸
- P.10 活動記録

ライチョウはかなり危機的 —私たちの出番です—

大森 弘一郎

2014年11月1日と2日に上野動物園と国立博物館の平成館で、第15回ライチョウ会議がありました。私もパネラーとして呼ばれ、少し皆様にお話ししました。非常に有意義な会であり、会員の皆様にもっと事前に周知して参加していただければよかったです。後でおもったのですが後の祭りです。それに代えて、その時のパネラーとしてお話ししたことを書いてみたいと思います。

「ライチョウ保護に動物園は何か出来るか、域外保全に対する動物園の取り組み」というのが今回のテーマでした。

ライチョウは20年昔に信州大学の羽田建三先生たちの20年間の調査により3000羽だと言われていましたが、2001年から調査の結果、現在は1700羽に減ったと

言われています。北岳周辺では1981年にあった63の縄張りが2004年には18に激減し、2014年には8になったそうです。

最近、絶滅危惧種ⅡBに指定されました。そしてトキのように手遅れにならないために、今から人工飼育の技術を確立しておこう、そのために、日本の保護鳥の雷鳥では研究が出来ないから、狩猟鳥であるノルウエーのスバル諸島に居るスバル雷鳥を使って研究しよう、というので飼育と繁殖が始まっています。

研究成果は上がっています。卵の搬送のことで、孵化技術のこと、餌と繁殖の関係、日照時間と繁殖の関係などなど。スバルバルでは白夜が2か月ぐらいありますが白夜の無い日

本の冬では、スバルバルライチョウの自然繁殖が起り得ないことが分かったようです。鳥は日照時間の変化に敏感なのだそう。雷鳥の生息の北限に居るスバルバルライチョウで南限の日本雷鳥の生理のことを考えると、言うのはどうも無理があるようです。もともと、トキのように日本ライチョウに代わって違うライチョウを山に放鳥することなどは考えられないことですから、この結果でも域外飼育の方向については十分な経験でしょう。

以上が背景、以下が私のお話ししたことです。域外保全の研究をしている皆さんの努力には敬服し、感謝しています。しかし私はこの努力の成果が役に立たないことを望んでいません。

動物園にライチョウがいて、山にはライチ

ヨウは居ないという域外保全によるライチョウ保護の矛盾を考えてください。私は域内保護を成功させて、域外保全の努力が無駄になることを望んでいます。しかし域外保全をやるということは、ライチョウの危機を伝える役として価値があるのだと思います。「あゝここまで来ているの」と。

私はライチョウは人間の先生、あるいは先導者であると思っています。なぜなら、ライチョウが住めない世界は人間も住みにくいだろう、それをどうやって防ぐかを事前に身をもって教えてくれているのがライチョウであるのではないかと思っていますからです。

温暖化の原因は人間が作っています。キツネやカラスやサルが山に上がるのは、人間の配慮の不足がそうさせているのです。考えてみてください。彼らがライチョウだけを餌にして生きることが出来ません。ライチョウは単なるついでのおやつです。

私の家の近くのカラスを見てみると良くわかりません。網の箱の中が見えないゴミ袋で捨てていると、カラスは減ります。たまたま不心得な人がいて、中の見える生ごみを網箱の外に置くとかすると、ときめんに集まってきて増えます。銀座のカラスも同じだと聞きま

した。

私たちが15年以上前に作った雷鳥保護の絵ハガキ。それは山の自然学クラブの会報の表紙にもなっているのですが、そのライチョウの地獄絵には狐とカラスがいます。昔から皆知っていました。ライチョウの域内に入った人は「ごみを絶対に捨てない、残さない」さらにごみを見たら拾ってください。山から残飯が消えたら、捕食者たちも餌のない山に來なくなるはずですよ。

その考えで15年ごろ前ですが、ライチョウ保護の絵ハガキを作りました。ゴミにならない、啓発になる良いものを作ろうとしました。そのために使える写真を写しに山に入りました。

山に入る人は、ある一本の道を通って入ります。上高地はバス、立山はバスとケーブルです。その中で入山する全員の教育が出来るはずですよ。そう思ってパンフレットや便箋やはがきを何万枚も作りました。ともかく我々の許せる範囲の経費を使いました。

室堂山荘は喜んでくれました。アルペンルートのは社は迷惑そうでした。環境庁の担当者も乗ってほくれませんでした。その反応で皆の熱も冷めてしまったのです。はがきも少

し残っていて追加の印刷はしていません。その痕跡が会報の表紙にあるのですが、会員はその意味を忘れているかも知りませんので、よく表紙の絵を見直してみてください。

今も少し活動は残っています。上高地でライチョウの張り子づくりを子供たちとやっています。作ったライチョウの型をラップしてその上に紙を貼って、型を取り出してそのあと貼り重ねるのです。子供さんの作業のそばにはライチョウの写真集を転がしておきます。親がそれを読みます。子供には作業を教えるが、ライチョウの重要さと自然保護の話を





します。出来たライチヨウは本当に子供さんの宝物になるようです。

後で写真やら手紙をもらうことがあります。このライチヨウを机の前に置いて、毎日ライチヨウや自然のことを考えながら成長する子供たちの未来が楽しみです。

1羽出ると1枚写し、それを集めたのがこの写真です。これは5年くらい前の写真です。それから後もつと増えています。ビクターセンターからホテルに場所を変えて続けていきます。穂高を見上げてあそこにライチヨウが



住んでいるんだよね。という子供の目は夢に輝いています。神秘で、可愛く、か弱いライチョウに、炭鉱のカナリアのように我々を守ってくれているライチョウのことを、もっと多くの人たちに知っていただきたいと思いません。

山に居るライチョウを保護して、数が減らないようにすることは重要です。その努力は人の生存にも役立つと思います。ライチョウを想うことは、人間の未来を想うことなので

2万年前の最終氷河期が終わってから、ライチョウは日本の山に閉じ込められて残存しました。その後、今から4000年ぐらい前に縄文海進という温暖化の時期がありました。そのころ人は海面上昇に合わせて居住を移動させたと思います。変化もゆつくりであり、人はそれに追従できたのです。だから今の私たちがいます。ライチョウもその温暖化を乗り切ったのでしょうか。

だから今度の人為的な温暖化も大丈夫だよと考えるのは誤りです。今度の温暖化はたぶん急激だから、人もライチョウも順応に大変です。さらに縄文海進の時に登山者はいませんでした。前の時はライチョウは気象にだけ

に追従すればよかったです。

保護というものは、やる人だけで出来るものではありません。トキの場合を考えてみましょう。昭和54年に空撮の本を出しましたが、丁度その少し前にトキの保護で議論が高まったことがあります。その時は自然保護の隅っこでトキの生息分布の空撮調査を提案し、佐渡島の農薬を全廃すればトキは安泰である、域外保全を考えるよりも、自然環境を良くしてウオッチすればよいじゃないかと、唱えていたのですが、声は届かず今のようになりました。

あまり言われていないのですが日本のトキは農薬の害で、農薬汚染したドジョウを主食としていて絶滅したのだと思っています。その同じ場所で取れた農薬汚染の可能性の有る米を安いと言う理由だけで人間も食べていたのです。

それは農家だけの責任ではありません。消費者が佐渡の米はトキのために無農薬にしている畑の米ならば、これは安全で、これを好んで買う、という行動をしていたら、事態はずいぶん変わったでしょう。国民、消費者の知識不足がトキを絶滅に追い込んだのだと思います。

ライチョウも同じです。消費者がもっと関心を持てば、登山者や観光客もモラルを高く持とうと思うでしょう。ライチョウの域内にゴミを残さず、ゴミを見たら拾う。そのことに域内の業者も環境省も一緒に協力する。そういうことが大切だと思います。

域外保全という研究が始まったと言うことは、ライチョウ保全と人間保護への凄惨な警告です。域外保全の研究が無駄になることを願います。スバルライチョウはパンダのように動物園の中だけで人々の関心を得ることを望みます。

上野動物園のボランティア解説をやっている方で、ライチョウ張り子の教育をやりたいと言って下さる方がいます。都内でライチョウ保護啓発活動が出来るのです。

私たちがもう一度登山者への啓蒙活動をやりたいです。今度は絶滅危惧種ⅡBです。環境省も協力してくれるでしょう。北岳の登り口と南アの山荘と、上高地に入るバスと、アールペンルートと、その他、効果的な場所を探しましょう。この冬の真っ白なライチョウを見に行きましょう。

(山の自然学クラブ会報第14号掲載)

ライチョウひな 猿が捕食

北ア・東天井岳

標高2800メートル 専門家「新たな脅威」

北アルプス常念岳周辺で国特別天然記念物ライチョウの生息調査をしている「信州ライチョウ研究会」の中村浩志会長（信州大名教授）らは31日、北ア・東天井岳周辺の高山帯で、ニホンサルによるライチョウのひなの捕食を確認したと発表した。高山帯での猿の活動はこれまで確認されているが、異なることによると、ライチョウの捕食が研究者らによって公式に確認されたのは初めて。中村会長らは、ライチョウにとって「新たな脅威になる」として、早急な対策を求めている。



調査は県の委託で6月に開始。ライチョウの分布やひなの生存率を確かめるため、2016年度末までに北ア北部や南アルプス・塩見岳、御嶽山を対象に進んでいる。同研究会が捕食を確認したのは8月6日、東天井岳山頂近く、標高約2800メートルの登山道付近で、成鳥の雌とひな2羽を観察していたところ、近づくにつれてきたニホンサル1匹がひなを捕まえて食べる場面を目撃、写真に収めた。親鳥とひなの1羽は逃げたが、猿の警戒する様子が見られなかったという。



中村会長は31日、県庁で開いた記者会見で「ニホンサルなど野生動物の生息域の変化を象徴する出来事。最も恐れていたことが起きた」と述べた。9月上旬にアイヌ山麓から頂の方へ芽吹きを始めるライチョウのひなや卵を食べたという記録はこれまでない。ひなをえさとして食べたのか、興味を持ってかじったのかを確認するため、ふんに羽や骨などが含まれていないか調べることも必要だ。

中村会長によると、猿は平地で数が増え、ライチョウがすんでいる北ア南部の乗鞍岳や南アルプスの高山帯でも近年、生息が確認されている。高山帯の猿は主に植物の芽などを食べると思われているが、一度ライチョウを捕食すると、群れの中で嗜好性として定着し、被害が急速に広がる恐れがあるとしている。

中村会長は31日、県庁で開いた記者会見で「ニホンサルなど野生動物の生息域の変化を象徴する出来事。最も恐れていたことが起きた」と述べた。9月上旬にアイヌ山麓から頂の方へ芽吹きを始めるライチョウのひなや卵を食べたという記録はこれまでない。ひなをえさとして食べたのか、興味を持ってかじったのかを確認するため、ふんに羽や骨などが含まれていないか調べることも必要だ。

標高2800メートル、今回の調査は同日までに、信州大山岳科学研究所の泉山茂之教授（動物生態学）の調査に現れることは昭和30年代から確認されている。新鮮な芽を好むため、6月ごろ山麓から頂の方へ芽吹きを始めるライチョウのひなや卵を食べたという記録はこれまでない。ひなをえさとして食べたのか、興味を持ってかじったのかを確認するため、ふんに羽や骨などが含まれていないか調べることも必要だ。

ライチョウの生息域は、今後は、他の生息域でも情報を集め、対策を検討する方針だ。当面は県自然保護センターなどと連携し、高山帯での猿の追い払いを呼び掛ける。羽や骨 ふんから調査を

ライチョウ保護の声が高まる中、北アルプスではニホンサルがライチョウのひなを捕食しているという衝撃的なニュースが流れました。新聞の記事によればこれまでにも登山者による目撃はあり、今回は初めて研究者によって確認されたそうです。

上高地でサルを観察していると、彼らが口にしている食物のほとんどは木の枝や新芽、果実、草の葉や根、川藻、といった植物やキノコなど

です。まれに川虫を食べていますが、小鳥や水鳥のひなを追っている姿を見た記憶がなく、ハシタとしてのイメージは薄いのですが、彼らも私たちと同じように雑食動物であるということとを思い知らされる出来事でした。あるいは小動物を弄ぶという習性もあるのかもせれません。今回狙われたライチョウ親子にはサルを警戒する様子が見られなかったということですから、サルを天敵と認識するようになるまでは、今回

のようなことが繰り返されるかもしれません。しかしサルは昼行性ですので、こうした高山帯での捕食行動が登山シーズンの日中に限られるのであれば、私たち登山者によって未然に防げるケースも多いはず。とぼけた表情に「かわいい」とカメラを向ける前に、彼らがライチョウに近付こうとしないか、これからはその行動に気を配らなければと思います。

元川里美

〈自然観察会報告〉

長野県大鹿村

リニア中央新幹線予定地を見る

自然保護委員 近藤 雅幸

リニア中央新幹線。夢の超特急ともてはやされ、東京と名古屋を結ぶ新しい交通システムとして期待する人も多いと聞く。

そのルートの一部が南アルプスの中央部をトンネルでぶち抜き、山梨県と長野県を結ぶことになっている。しかし、訪れると身に染みて感じるのだが、南アルプスは手つかずの自然の宝庫である。これだけ高く広大な山域で人の手が入らない原始の自然が息づいているところは、日本では他にないといつてもいいだろう。

リニア中央新幹線のトンネルが南アルプスを貫くことは当然、そこに息づく大自然に大きなダメージを与えることになる。自然ははぐくむ豊かな水はトンネルの中に抜け、数多の水系が枯渇の危機に瀕するのはもちろん、工事で出た残土は日本アルプスを代表する仙境を埋め尽くすことになる。このプロジェクトが南アルプスの自然環境に与えるダメージ

は他にも枚挙にいとまがない。

その現場を見てみんなで勉強し、議論しよう。そんな企画が持ち上がったのは今年の春先である。リニア中央新幹線が通るコースのうちの一つ、長野県大鹿村で、リニア中央新幹線による自然破壊の危機に警鐘を鳴らし続けてきた村在住の佐藤明穂会員と連絡を取り、8月下旬に彼の案内の元で現場を回ることになった。

8月29日の昼、奥深い山間にある大鹿村役場の駐車場に集合したのは谷内理事、川口委員長、富澤委員、渡邊委員、下野綾子委員、近藤委員。静岡支部から大島支部長、白鳥会員、川口委員長の友人、大村さん、そして案内役を引き受けていただいた佐藤会員の総勢10名である。

鹿塩の高台にあるすぎ農園で蕎麦に舌鼓を打った後、秋葉街道の下をリニアのトンネルが通る予定地を視察。今は何の変哲もない山間の谷間を拓いた畑地だが、今後どう変わっていくのか。静けさが心地よい場所だけに心配になってくる。

大河原の川辺に近い中央構造線博物館は昭和36年に大きな山体崩落があった跡地に建

てられた小さな村営の博物館である。学芸員の河本氏がほとんど一人で運営しているようなところだが、我々の一行が行くことは佐藤会員を通じてあらかじめ伝えてあったので、到着するとすぐに河本さん自らが説明に立つてくれた。初めは中央構造線や周囲の地質について淡々と説明をしていたのだが、リニア中央新幹線の話になったとたん、ギアがトツプに切り換わったようにほとぼるような熱い語りが始まった。いかにこの場所にトンネルを掘ることが自然環境を破壊するのか、造山活動の真ただ中にある南アルプスを掘ることがどれだけの危険を生むのか。わたしたち一行はその熱に中てられながらも、話の内容を聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

かなり長い時間、中央構造線博物館にいたので、その日は赤石荘で造山活動の余録である温泉を味わって、そのまま佐藤会員が運営している延齢草に向かった。

延齢草は廃校となった中学校の一部を大河原の高台に移築した宿泊体験施設である。学校の建物だったというだけあって、軽井沢の別荘地にあってもおかしくないような瀟洒な雰囲気がある。

延齢草では佐藤会員と奥さんがすべて手作りの料理を提供してくれた。特に出色なのがチーズフォンデュ。自家製のチーズを使っているから、コクとうまみがそんじょそこらのものと違う。

その場にはゲストとして佐藤夫人のお父さんである小林俊夫さんが参加し、リニア中央新幹線工事が大鹿村の人々の生活にいかんに深刻な影響を与えるかを語ってくれた。小林さんは以前、南アルプススノーパードの工事がおこなわれたときも反対運動にかかわっていて、南アルプスの自然環境保護についてはひとかたならぬ情熱をかけている人物である。食事の後も小林さんを含めた11人は夜が更けるまで酒を酌み交わし、リニア新幹線問題について熱い議論を交わした。

日があけて8月30日。窓の外を見たら昨日の夕方から降り出した雨がしとしとと地面を濡らしている。

この日はリニア中央新幹線のトンネルがその真下を通ると想定されている小河内沢の一部を小林さんの案内で遡る予定だったが、佐藤さんの判断で、トンネル工事によって大きな影響を受けることになる集落、釜沢と、そ

の近くにある試掘抗のあとを視察することになった。

まずは小渋川沿いの中腹につけられた細い道を通って、釜沢へ向かう。この道は工事が始まると大型トラックが行き来するようになること。そうなればここにも大きな道路改修工事が入るに違いない。ただでさえ急斜面の地滑り地形。いったいどうなってしまうのかと心配は尽きない。

釜沢の自治会長はイギリスから日本にやって来て、1989年からここに住み着いているサイモン・ピゴットさん。この地がとことん気に入っているの、リニア新幹線工事によってそれが破壊されていくのを黙って見ているわけにいかないと、ここでも熱い話を聞かせてもらった。

釜沢の奥には御所平という場所がある。南北朝の時代、宗良親王が30年近くにわたって住んでいたと伝えられ、その実績をしのんで方丈ほどの庵が建てられている。リニアとは直接関係ないが、佐藤さんの案内でそちらも訪れることになった。

庵の周囲は静まり返り、時々鳥の音が響くのみ。しかし工事が始まればこの静寂は二度

と帰ってこないだろう。



(写真：サイモン・ピゴットさんの話を聞く)



(写真…試掘抗跡を視察)

試掘抗は小渋川と小河内沢の合流点近くにあるが今は埋められて跡しか残っていない。さらに小渋川沿いに田畑が広がる場所は工事で掘り出された残土を集積する場所になるという。静かでのどかな場所だが、こののんびりとした風景がなくなってしまうのは残念なことこの上ない。また、ここに集積するとう残土は川が増水した時に災害の原因にならないのだろうか心配になる。

そういった場所を巡っているうちに、昼近くになった。最後は郷土料理の右馬允でうどんに舌鼓を打って名残惜しい大鹿村をあとにした。

たった二日間だが、とても中身の濃い自然観察会だった。リニア中央新幹線の工事が南アルプスの自然環境にもたらす影響はもちろんだが、そこに住む人々の生活にどれだけ大きなダメージを与えるのか。それを直接見て聞くことができただけでも、得難い収穫があったといえるだろう。

今後は自然保護委員会、そして日本山岳会が、南アルプスの自然と人に多大なマイナスの影響を及ぼす大プロジェクトに対して、どのように対応していくか考えていくことが必

要である。そのための大きなヒントを与えてくれた二日間であった。



(写真…釜沢から赤石岳を望む)

図書紹介 安間繁樹委員の最新刊

「失われゆく民俗の記録」

ボルネオ島21世紀初頭クニャ族とブナン族」の紹介

自然保護委員 下田 俊幸

自然保護委員会の安間繁樹委員が今般、長年フィールドとしてきたボルネオ島の先住民族の風俗習慣を記録した本書を上梓しました。安間委員によれば、2000年代初頭、ボルネオ島東部および北部カリマンタンの奥地を再訪した際の日記が元になっています。ボルネオ島は総人口1800万人ですが、このうち先住民は200万人。近代化により伝統的な暮らしはじきになくなると痛感し先住民の生活ぶりを紀行文としてまとめたものです。巻頭の8ページがカラー写真集で奥地の森林、村々の住居、旅の移動手段、農耕等の暮らし、文化習慣に因んだ写真が掲載され、先住民の世界に引き込まれます。首狩り、耳への造作、入れ墨の風習や森羅万象との結びつきを表す紋様、祭事の衣装とか興味深いものです。安間委員は哺乳類の生態研究が専門分野で、十数冊の著書を出されていますが、それを拝読するとこれまでの研究者としての歩みや取

組み姿勢がわかります。単に専門分野を狭義に追求するのではなく、取り巻く

自然環境や他の動植物（人類も）とともに包括的にとらえていく姿勢です。それは、往年の探検家例えば生物相（分布境界線）のウォレス線として名を残す英国人博物学者A. R. ウォレス（著書「マレー諸島」が有名）の博物学の視点とも重なるものです。

研究者のフィールドとしては、琉球列島特に西表島でのイリオモテヤマネコの生態調査から始め、1985年にはボルネオ島を往訪、JICA（国際協力事業団／機構）の海外派遣専門家として約30年に亘り動物生態調査および若手研究者の育成を担っています。

【照会先】 出版元・自由ヶ丘学園出版部、

電話・052・721・0171、

定価・1500円（消費税別）

【参考】 主な既刊本は下記の通りです。図書館等で閲覧できると思います。一読を。

・「アニマル・ウォッチング——日本の野生動物」晶文社1985. 7



- ・「キナバル山——ボルネオに生きる自然と人」と 東海大学出版会2004. 10
- ・「ボルネオ島最奥地をゆく」晶文社1995. 11
- ・「ボルネオ島アニマル・ウォッチング」文一総合出版2002. 9
- ・「熱帯雨林の動物たち——ボルネオにその生態を追う」築地書館1991. 5
- ・「琉球列島——生物の多様性と列島のおいたち」東海大学出版会2001. 10
- ・「ネイチャーツアー西表島」東海大学出版会2011. 6
- ・「西表島自然誌」晶文社1990. 8
- ・「石垣島自然誌」晶文社2007. 2

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈九月度〉

①理事会報告9月9日(水)

「九州脊梁山脈トレイルラン」の名義後援は、経緯を考慮し、「熊本支部から実行委員会に対し、一般登山者の安全、事故防止、自然環境の保全等について申し入れること及び営利目的となっていないことを、大会の決算書等から熊本支部において確認することを条件」として承認することとした。

②山岳団体自然環境連絡会…9月18日(金)

出席者 川口、富澤。

・長野県環境部自然保護課から、山岳団体自然環境連絡会宛にライチョウの生息域におけるニホンザルの目撃情報の提供依頼があった。

③自然保護全国集会(四国)について

日程：平成28年7月16日(土)、17日(日)、宿泊：工石山青少年の家、会場：高知市の県立牧野富太郎植物園と決定した。

④ライチョウ保護活動の支援について

NPO法人山の自然学クラブのライチョウ保護活動を支援するため、『木の目草の芽』の購読費カンパを財源として、公益社団法人日本山岳会自然保護委員会の名称を入れ

たハガキを二千枚作成した。

⑤支部自然保護委員会の人事

・青森支部自然保護委員長の交代
・山形支部自然保護委員会委員長の退任(委員不在)

〈十月度〉

①理事会報告 9月9日(水)

・ネパール大地震救済募金は分割して送金する。

②山岳団体自然環境連絡会 10月30日(金)

出席者：川口、富澤、渡邊。

・「山の野生鳥獣目撃レポート」パンフレットが完成し、本部自然保護委員会に二千部送付された。

・11月27日(金) 環境省担当官とのシカ問題についての勉強会を開催予定。

③第19回「森の勉強会」(10月24日(土)・25

日(日)、妙心寺・嵐山)に川口委員長、富澤が参加した。

④自然観察会の予定

講師：山田業務執行理事、
日程：1月24日、場所：明治神宮
⑤木の目草の芽118号発行

◆カンパのご報告◆

委員会活動へのカンパを頂きました。

・7月11日・12日の全国集会参加者より
・8月29日・30日の大鹿村自然観察会参加者より
・自然保護委員より

合計 17,850円

ありがとうございます。川口 章子

編集後記

ライチョウの張り子を嬉しそうにみつめる子供たちの写真には思わず口元がほころびます。大森さんの取り組みを、私も実際に目の前で見ることがありますが、一体を完成させるのにはかなりの根気が必要です。地道な張り子の作業を通して、ライチョウの大きさや形を自分たちの指先で繰り返し確認することができます。大人が多くを語らなくても、子どもたちが自ら感じ取ってくれるものは、ほかり知れません。

これからの自然保護には啓蒙が重要であると全国集会でも話題になりましたが、大森さんのこうした試みは、啓蒙活動にもまだ様々な可能性が秘められていることを示唆している気がします。

元川